

## 邪妖都市妖奇譚三

# 女退魔師無限出產地獄編体験版

……まるでダーツが的を射抜くように、無数の鋭い針状触手が鈴音の大きすぎる乳房に突き刺さり、その直後、まるで爆発が起きたかのよう激痛が生じて、鈴音の口から絶叫がほとばしった。

鈴音の大きな乳房には、片方につき、二〇〜三〇本の針が深々と突き刺さっており、その刺し傷からは、真っ赤な鮮血がツーツと糸のように垂れ流れた。だが、突き刺さってそれで終わりではない。鈴音の乳房を貫いた触手たちは、各々の勝手な動きでぐねぐねと身をくねらせるものだから、針が乳房の中でぐりぐりと蠢きまわり、その結果、乳房はその内側から重く鋭く鈍い痛みを発してやまなくなった。

「ぐうううツ、ふぐうううううううう……ツ！」

苦痛に顔をしかめ、歯を食いしばりながら必死に耐える鈴音。そんな彼女を見て、邪妖鬼が愉快そうに笑い声を発した。

「クククク。ナカナカイイ表情ヲスルジャナイカ。ドウダ、痛イカ？ ソレトモ苦シイカ？ ン？ 答エテミロ、娘」

その言葉を聞いて、鈴音がキツと邪妖鬼を睨みつけた。

「ふ、ふん……ツ、な、なによ、この程度……ツ。ぐウツ！ べ、別、に……うぐうツ、い、いい痛くも、かゆくもツ、つつツ！ な、ないん……、だから……ツ！ うぐぐううううう……ツ！」

顔をしかめ、言葉もたえだえになりながらも、それでも相手を嘲るように笑ってみせる鈴音。退魔師としての意地と矜持と誇りにかけて、何があんでも悪には屈しないというその行為が、決死の努力の賜物であるという事実は、もはや誰の目にも明らかであると言っていいだろう。そ





りにして、顔中、涙と涎と鼻水でぐちゃぐちゃに濡らしながら、この世のモノとは思えない叫び声をあげて悶え苦しむ鈴音。

しかし、本当の苦しみは、これからが本番であった……。

……続きは本編でお愉しみてください。